

## 田中大秀著 『蜻蛉日記紀行解』 について

金, 英燦  
韓国啓明大学校非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/19782>

---

出版情報 : 語文研究. 108/109, pp.95-110, 2010-06-02. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 田中大秀著 『蜻蛉日記紀行解』 について

金 英 燦

## 一 はじめに

高山市郷土館の香木園文庫（荏野文庫）には、田中大秀の手になる『蜻蛉日記』の注釈が二種蔵されている。一つは、坂徹著『かげろふの日記解環』（天明五年刊）に墨と朱とを以って本文校訂・注釈などの書入れを施したもので、仮に『蜻蛉日記解環補遺』と称されているものである。書入れが施されたのは、第七冊の奥書「戊寅へ〓文政元年〓二月十三日闋畢 大秀」と、第二冊の奥書「壬午へ〓文政五年〓九月十二日再考於荏名文政九丙戌年正月廿二荏野に来て再三考（花押）」から察せられるように、文化の末から文政にかけての時期であろう。

もう一つは、『蜻蛉日記』の初度の初瀬詣で、唐崎祓え、石山詣で、再度の初瀬詣での紀行部分を抜き出して、『蜻蛉日記解環補遺』よりも厳密に注釈を施した『蜻蛉日記紀行解』（文政十三年成立）で、部分的な注釈ではあるが、研究史的に意義深い注釈である。共に吉澤義則編『未刊国文古註釈大系』（第十三冊、帝国教育会出版部、昭和十三年一月）に翻字されている。特に『蜻蛉日記紀行解』は、近年刊行された田中武司編『田中大秀（第四卷）「日記・紀行」』（勉誠出版、平成十六年十月）において、付紙などもより忠実に翻字されているが、翻字にあたっての誤字・脱字なども散見する。

『蜻蛉日記紀行解』について最初に報告した岡田稔氏は、「蜻蛉日記紀行解について」<sup>注1</sup>において、

「蜻蛉日記紀行解」（一冊）は飛騨高山の香木園文庫（荻野文庫）に保存せられてゐる田中大秀の遺著で、自筆初稿本である。（中略）蜻蛉日記中の紀行にあたる所を抄出し、解環の著者の訂正した本文を、更に善本に據つて校訂し、これが注釋を施したもので、参考書少き蜻蛉日記研究上誠に見のがすべからざる著述である。（中略）

本文の校訂上注意すべきは「和文粹」といふ書の本文に依據してゐる点が可なりある事であつて、この書が誰の著でどんなものは淺學の私にはわからぬが、それが出現する事によつて、蜻蛉日記の本文校定の上に貢獻する所大なるものがあらう。尚「文の栞」といふ書の中に儀同三司母の泊瀬紀行辛崎紀行石山紀行が載つてゐる旨群書一覽に見えるが、この儀同三司母もやはり道綱母と混同したものでないかと推察されるが如何なものであらうか。

と述べている。岡田氏は、参考書として『蜻蛉日記紀行解』にその名が記されている『和文粹』と、『群書一覽』に見える『文の栞』について言及しているが、これについては第三節で詳しく述べる。以後、柿本奨『蜻蛉日記全注釈』<sup>〔註2〕</sup>（角川書店、昭和四十一年十一月）、木村正中『蜻蛉日記紀行解』<sup>〔註3〕</sup>

（『日本古典文学大辞典』、岩波書店、昭和五十八年十月）、森田兼吉『蜻蛉日記紀行解』<sup>〔註4〕</sup>（『日本古典文学大事典』、明治書院、平成十年六月）、岡田博子『蜻蛉日記紀行解』<sup>〔註5〕</sup>（『日記文学事典』、勉誠出版、平成十二年二月）などに『蜻蛉日記紀行解』についての言及がみえる。

『蜻蛉日記紀行解』は『竹取翁物語解』『土佐日記解』などで名高い田中大秀の注釈書である故に、その価値は高く評価されながらも、注釈内容についての具体的な研究は管見に入らない。本稿では、『蜻蛉日記紀行解』の依拠本文を明らかにすることを中心に、注釈作業の資料となつたものについて調べることによつて、田中大秀の注釈態度を具体的に考察する。

## 二 『蜻蛉日記紀行解』の依拠本文

『蜻蛉日記』の注釈は、近世に入つてからの契沖の書入れ本に始まる。元禄九年四月、自身が所持する本に、水戸中納言光圀卿御本を対校本として用い、本文校訂および注釈を書き入れたものがそれである。以後、多くの学者たちは契沖の書入れ本を参考にしつつ、元禄十年（二六九七）・宝暦六年（二七五六）・文政元年（二八一八）に刊行された板本に、自

分の説を書き入れるかたちで、『蜻蛉日記』の注釈は行われるようになった。

特に、天明五年（一七八五）に刊行された坂徴著『かげろふの日記解環』は、以降の『蜻蛉日記』の注釈に多大な影響を与えた。本稿で取り上げる『蜻蛉日記行解』の著者田中大秀も『かげろふの日記解環』の影響を受けた一人である。

田中大秀は『蜻蛉日記行解』の「凡例」に、

今伝はれる摺本（元本八冊）は脱せる文誤れる字いと多くて、唯片枚たに読あへぬを、天明の頃水母翁（ミヅハハ）洛下坂徴仲文と巻首に記せり」と云人、この日記にいたく心を尽して、水戸殿の御本難波の阿者利の本なにとを得て、深く考遠く思慮て解環と云解書を（十八冊）著して、大體は読るゝやうには成ぬれと（四丁表）

と、「摺本（元本八冊）」と『かげろふの日記解環』について明記している。「元本」というのは板本のことであるから、『蜻蛉日記行解』の日記本文は、板本と『かげろふの日記解環』に拠っている。この他にも、「凡例」には本文校訂に用いた資料として、

猶心ゆかねは彼元本（モトノキ）に檢て按は中々に元本の勝（マカ）たる処も見え、又大秀か新（アラタ）に思よれる事もあるを書人おきつるに、又日下部道堅か得たる伴蒿蹊翁の考て筆加われたる本、長瀬俊香か得たる或人の書人の説ある本とを見て、斯は物しつるになむ。されと必と定たるにあらねは善本も出、物よく考る人も出来は、今の非（ヒガ）ことをも訂正（タメ）してむとてなむ。（四丁裏）

という書き入れ板本のこと記されている。「伴蒿蹊翁の考て筆加われたる本」というのは、「以契沖阿闍梨校正本書人畢然猶未詳處許多故間以愚按附注不得明辯者闕疑云爾 安永五丙申歲九月念七日功畢 間田（マ）子蒿溪述」という識語を有する伴蒿蹊書人れ宝曆板本のこと、宮内庁書陵部と東京大学付属図書館にそれぞれ蔵されている。また、「長瀬俊香か得たる或人の書人の説ある本」については不明であるが、おそらく書き入れ板本のことであろう。

ところで、岡田稔氏は、「田中大秀と蜻蛉日記（注6）」において、

大秀は紀行解を著すにあたつて元禄版の刊本と解環本との外に、日下部道堅・伴蒿蹊の加朱になる本と、長瀬俊香が傳へた或人の書人ある本とを用ひた上に、中巻以後

は「和文粹」といふ書を参照し、これによって、校本の誤、坂氏解環本の誤を訂正してゐる。

と、『蜻蛉日記紀行解』の日記本文は「元禄版の刊本」に拠っていると述べているのであるが、前掲『蜻蛉日記紀行解』の「凡例」には、「摺本（元本八冊）」としか記されていないので、それが「元禄十年版」であるとは、にわかに断定できないのである。

『蜻蛉日記』の板本には四種類（元禄十年版・宝暦六年版・文政元年版・無刊記版）があるが、上村悦子「蜻蛉日記版本の研究」<sup>(註)</sup>の分類によれば、大きく二種類に分けられるという。それは、元禄十年版と一致する宝暦六年版（A）と、文政元年版・無刊記版と一致する宝暦六年版（B）との二種類で、その相違は上巻の十七丁より二十丁までの、わずか四丁のみに限られていて、他の部分はすべて同じであるという。この四丁は、日記本文の天徳元年十月から天徳二年七月までの記事で、『蜻蛉日記紀行解』の対象となる日記本文には該当しない箇所である。したがって、『蜻蛉日記紀行解』の依拠した板本がいずれであるかも断定できないのであって、『蜻蛉日記紀行解』の日記本文が「元禄版の刊本」に拠っていると断定する岡田氏の根拠も不明である。

以下、『蜻蛉日記紀行解』の日記本文および注釈の部分を考察することによって、その依拠した『蜻蛉日記』本文について明らかにしたい。

ちかく車よせて、おくなる方に暮などひきおろして、みな下りぬ。手足も浸したれば、こゝち物思ひはるくるやうにぞおぼゆる。<sup>(註)</sup>（中巻、天禄元年八月、唐崎祓え）

右は、唐崎祓えからの帰途、走井についたときの場面である。問題になるのは「こゝち」であるが、板本をはじめ古本系の写本にも異なる箇所である。『蜻蛉日記紀行解』には、「近く車よせて、あてなる方に暮など引まはして、皆おりぬ。手足もひたしたれば、こゝち物思もはるけるやうにぞおぼゆる。」という本文と共に、

こゝちハ多くといふに同し。晴ける方の多き也。こゝち元本摩滅にてラ字未詳。ち字ともみゆ。こちハ当時病をいへれと、こゝハ心持也。心ちのよきをいはるゝ也。さる時は上ひたしたるとなければ不応。猶こちの方よりしかるへし。（『紀行解』三十八丁表）

という注がある。この注は、『かげろふの日記解環補遺』にはないので、『蜻蛉日記紀行解』の段階で新たに付け加えられた注であろう。

『蜻蛉日記紀行解』の拠った板本文は「こゝら」となっているが、それは摩滅により判読が困難で、「ち」とも見えるという注である。該当箇所は元禄十年版・宝暦六年版・文政元年版の『蜻蛉日記』板本をそれぞれ揚げよう。左に掲げる元禄十年版および宝暦六年版の中巻二十一丁裏の図版を確認すれば、三行目にある「こゝち」という文字が確認できる。

ちかゝく〜ぬ〜せてあ〜り〜る〜は〜ゆ〜く〜ひ〜が〜  
 ひき〜れ〜つ〜て〜え〜な〜れ〜た〜わ〜て〜あ〜い〜し〜き〜れ〜ん  
 か〜ら〜物〜ぢ〜ひ〜し〜も〜も〜に〜た〜げ〜ゆ〜ひ〜い

元 禄 版

ちかゝく〜ぬ〜せてあ〜り〜る〜は〜ゆ〜く〜ひ〜が〜  
 ひき〜れ〜つ〜て〜え〜な〜れ〜た〜わ〜て〜あ〜い〜し〜き〜れ〜ん  
 か〜ら〜物〜ぢ〜ひ〜し〜も〜も〜に〜た〜げ〜ゆ〜ひ〜い

宝 暦 版

ちかゝく〜ぬ〜せてあ〜り〜る〜は〜ゆ〜く〜ひ〜が〜  
 ひき〜れ〜つ〜て〜え〜な〜れ〜た〜わ〜て〜あ〜い〜し〜き〜れ〜ん  
 か〜ら〜物〜ぢ〜ひ〜し〜も〜も〜に〜た〜げ〜ゆ〜ひ〜い

文 政 版

元禄十年版と宝暦六年版に対し、文政元年版の該当箇所は明らかに「こゝら」に見え、それは『蜻蛉日記紀行解』で述べられているように、版木の摩滅によるものと思われる。

本稿で用いた宝暦六年版『蜻蛉日記』板本の図版は、静嘉堂文庫蔵山岡浚明書入本であるが、該本は前掲の上村悦子「蜻蛉日記版本の研究」では、「宝暦版A類(1)安井嘉兵衛再板本」①静嘉堂文庫所蔵山岡浚明手校本(八冊本)と分類されている。すなわち、元禄十年版と一致する宝暦六年版(A)に属する板本である。『蜻蛉日記紀行解』には「摺本(二本八冊)」と凡例に記されている板本とともに、本文校訂に用いた資料として「伴蒿蹊翁の考て筆加わられたる本」という書き入れ板本の名も明記されている。伴蒿蹊書入れ宝暦板本は、「蜻蛉日記版本の研究」では「宝暦版B類、書林、刊行年月、A類(1)と同じ。」の項目に、

- ① 桃園文庫所蔵本。八の末尾に朱筆で「以契沖阿闍梨校正 本書入畢然猶未詳處許多故間以愚按附注不得」明辯者闕疑云爾」安永五丙申歲九月念七日功畢。間田子蒿蹊述 伴大人受借 文化五戊辰七月十四日書写之畢天曆翁正義 藏」とある。

① 東京大学図書館所蔵。伴蒿蹊校本。朱筆で、間田子蒿蹊

述（前掲桃園文庫本①と同じ）の識あり。

と紹介されている。伴蒿蹊書入れ宝暦板本は文政元年版・無刊記版と一致する宝暦六年版（B）であり、それを田中大秀は参照しているのである。本稿で用いた元禄十年版と宝暦六年版（A）の図版では「こゝち」と確認できる箇所が、宝暦六年版（B）、すなわち大秀の参考できた「伴蒿蹊翁の考て筆加わたる本」では「こゝら」となっていたので、「こちら元本摩滅にてら字未詳。ち字ともみゆ。」という注記になったのではなからうか。従って、『蜻蛉日記紀行解』の用いた『蜻蛉日記』の板本は宝暦六年版（B）か文政元年版であろうと思われる。

前掲の岡田氏「田中大秀と蜻蛉日記」では、『蜻蛉日記紀行解』の日記本文は「元禄版の刊本」に拠っていると述べている。岡田氏は、同論文の三年前に発表した「蜻蛉日記に関する新発見<sup>註1</sup>」において、「私は最近、宝暦板と文政板とでは上巻の十七枚目の表から二十枚目の裏へかけて、次の如く二十個所の異同のある事を発見した。」と述べているので、板本の間に異同のある事実については把握していたと思われる。しかし、上巻の四丁以外のすべての『蜻蛉日記』板本は、「元禄十年版」と一致するので、『蜻蛉日記紀行解』の日記本

文は「元禄版の刊本」に拠っていると判断したのであろうか。『蜻蛉日記紀行解』の対象となる日記本文のなかで、板本の種類が確認できる用例は、管見の限りここに示した一例しかない。しかし、『蜻蛉日記紀行解』の用いた板本を確認できるということでは、重要な意味を持つといつてよいであろう。

### 三 『蜻蛉日記紀行解』の参考書

——『和文粹』（文の栞）との関係——

田中大秀は『蜻蛉日記紀行解』の注釈作業をするにあたって、凡例に明記されている書入れ板本以外にも、いくつかの資料を参照している。本節では、『蜻蛉日記紀行解』の唐崎祓えにのみその名が見られる、『和文粹』に注目したい。

第一節に掲げた岡田氏の「蜻蛉日記紀行解について」では、『和文粹』と『文の栞』について言及しながらも、二つの関係については明確にされていない。しかし、『未刊国文古註釈大系』の「蜻蛉日記紀行解問題」で、「本書は、大體蜻蛉日記解環に據り、伴蒿蹊の加筆本や長瀬俊香藏の書入本等を以て（中巻以後は「和文粹」（文の栞）が縷々引用されてゐる）校訂し、註釋を加へたものである。」と述べられている

ように、『和文粹』と『文の栞』とは同一の書物である。おそらく『文の栞』の漢文跋（藤原忠胤）に「和文之粹者名曰文栞」とある記述を受け、『蜻蛉日記紀行解』では『和文粹』の名で引用されていると推測される。

『文の栞』は、六箇所にわたって『蜻蛉日記紀行解』に引用されている。その最初の一例を挙げよう。

いはんや関に到て、しはし車とゝめて牛飼などするに、むなくるま引つゝけてあやしう木とおひこる頃しも、いとをくらき中より来るも、心ち引かへたるやうにおほえていとをかし。

○「せき」を元本と<sup>き</sup>と誤れり。和文粹と云物に載たるに従つ。逢坂関なり。（『紀行解』三十丁裏）

問題の「関」は、古本系・板本系の諸本が「とき」という本文で、異同のない箇所である。「とき」となっている板本の本文は誤りで、「せき（関）」と本文改訂を施した『文の栞』の説に従つたという注である。田中大秀は『蜻蛉日記紀行解』の注釈作業に先立って、『かげろふの日記解環補遺』においても、

いはんや時にいたりてイカ、。誤脱アルヘシ。いはんやノ下ニ必詞アルヘキナリ。時ハ誤ナルヘシ。いたりてノ上必地名ニテ山科トカ走井トカアルヘシ。和文粹ニいはんや関に至てトアリ。時ノカナをきフときト誤ナルヘシ。サレト猶説アルヘシ。（『かげろふの日記解環補遺』第八冊一丁裏）

と、『文の栞』を参照しているが、内容はおおむね一致している。<sup>注</sup>

『文の栞』の説を引用し、その本文改訂案に従っているのはもう一例ある。それは、

さて車かけて其崎にさしいたり、車挽つらねてはらへしにゆくまゝに見れば、風打吹つゝ波高くなる。行かふ舟ともほ<sup>き</sup>あけつゝいく。

○「行かふ舟とも帆引<sup>き</sup>挙つゝ」ハ元本帆をを<sup>と</sup>と誤れり。和文粹に従て改つ。（『紀行解』三十四丁表）

という箇所、近時の諸注釈書も、この「関」「帆」の説を採っている。

『蜻蛉日記紀行解』に引用されている『文の栞』の残りの



四例は、

関の山路、あはれくとおほえて、行前を見やりたれば、

○「関の山路」ハ元本関のちと有を、伴翁ハみちと補ひ、和文粹関の比とも坂氏か山字補へるぞ。まさりたるに従つ。(『紀行解』三十一丁裏)

大きなるあふちの樹、たゝひとつたてる陰に車かきおろして、馬とも浦に引おろしてひやかしなどして、

○「ひやかし」を元本ひやうしと有を、坂本改たり。和文粹また伴本う字を除たり。其もよろし。(『紀行解』三十三丁表)

石どもにおしかゝり、水遣たる桶の上ををしきにすゑて、物くひて手つからす斗はんなどするこゝち、いと立うきまであれと、

○水飯なり。元本はんをえ一字に誤れり。和文粹にはす(灌)すきとせるも聞えたり。(『紀行解』三十八丁裏)

おりたれば、心ちいとせん方なく苦しきに、とまりたる

人々おはしましてとはせ給ひつれば、

○「おはしまして云々」ハ留守の人々の詞にて、男公おはしまして云々と云なり。元本おくましてと有り。和文粹にはいてましてとせり。元本給ひの傍におはしましと付たり。(『紀行解』三十九丁裏)

のようであるが、いずれも紹介にとどまつている。

本節では、『蜻蛉日記紀行解』での『文の栞』の引用が、なぜ唐崎祓えにのみ限定され、初瀬詣と石山詣では見られないのかについて考えてみたい。

先ず、『文の栞』については、尾崎雅嘉著『群書一覽』(享和二年刊)に、

『フミシオ』 七卷八本。  
『文乃栞』

撰者の名をあらはさず、新発意明阿弥陀佛序あり。卷末に安永丁酉十一月藤原忠胤漢字の跋あり。扶桑拾葉集の中其餘の文章数編をのゝ文體を分ち収む。

という言及が見られる。『蜻蛉日記』の紀行部分の中、初度の初瀬詣で、唐崎祓え、石山詣でが、『文の栞』(卷之五紀行の部、泊瀬紀行、辛崎紀行、石山紀行)に含まれている。そ

の『文の栞』には、新發意明阿弥陀佛へ山岡俊明の序と、藤原忠胤へ大久保忠胤の漢文跋が備わっているので、山岡俊明編とされている。

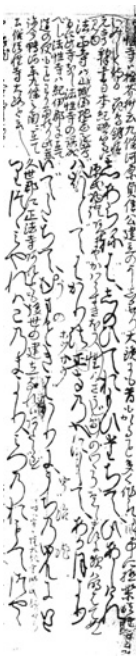
山岡俊明は、静嘉堂文庫蔵宝暦六年『蜻蛉日記』板本にも詳細な書入れを残し、『蜻蛉日記』の本文研究にも多大な寄与をした人物である。山岡俊明が、静嘉堂文庫蔵『蜻蛉日記』宝暦板本に書入れを施したのは、中之上巻の「明和五戊子へ一七六八」年八月廿日再考裏書畢「俊明」と、下之上巻の「明和庚寅へ明和七年」二月十九日再考畢「俊明」の識語から分かるように、明和五年から明和七年にかけてのことであって、『文の栞』が刊行された安永七（一七七八）年よりは八十年前のことである。後に挙げる具体的な例からも察せられるが、『文の栞』の『蜻蛉日記』の紀行部分は、静嘉堂文庫蔵宝暦六年『蜻蛉日記』板本をもとにして成立したと思われる。

しかし、『文の栞』の『蜻蛉日記』の紀行部分に限っていえば、山岡俊明編であるにしては、どう考えても不自然なところがある。それは、日記本文の欠陥箇所と本文脱落箇所である。

まず、日記本文の欠陥の例から挙げよう。次に挙げる『文の栞』の本文は、初瀬詣で（初度）の門出の場面である。

「たゝん月には大嘗會の御禊、これより女御代いたしたゝるへし。これをすくしてもろともにはやは」とあれと、我かたのことにしあらねは、忍びおもひたちて、日あしければ首途はかりす。法正寺の辺にして暁より立出。卯のときはかり宇治の院にいたりつく。（巻五、十四丁表）

おおむね、現行『蜻蛉日記』の伝本に共通しているが、板本をはじめ諸伝本が「むまととき」「むまのとき」となっている箇所が、「卯のとき」となっている。一夜を法正寺の付近で過ごし、夜明け前から出発して卯の時（午前六時前後の二時間）に宇治の院に到着したという『文の栞』の本文は、午のとき（正午前後の二時間）となっている諸伝本と比較するまでもなく、このままでは筋が通らない。該当箇所の静嘉堂文庫蔵山岡俊明書入れ『蜻蛉日記』宝暦板本の図版を挙げよう。



山岡俊明は、板本の三行目にある「むまととき」の「む」の

字を見せ消ちで「う」に改め、また「ま」と「と」の間に「の」の字を補い、「うまのとき」という本文改訂を行っている。『文の栞』では、「うの」という山岡浚明の書き入れをそのまま受け、「う（卯）のとき」という本文を立てているが、明らかに誤った改訂であろう。

このような不合理な改変のほか、『文の栞』には板本の本文を脱落させた箇所も目立つ。そのような箇所は四箇所あり、それぞれで欠けている本文は、次のとおりである。

- ①「かりにうちのみんなにおはしまへつきてかつらせ給ひ」  
（初度の初瀬詣で、上巻五十二丁裏九行）
- ②「なとそいふもしさらすは光たいのみこたちかならん」  
（石山詣で、中巻二十六丁裏十行）
- ③「にたゝさしいてにさしいてつれはいと心ほそけにてたてる」  
（石山詣で、中巻三十一丁表十一行）
- ④「にうつりてある風うちふきてうみのおもて」  
（石山詣で、中巻三十二丁裏六行）

これらの脱落本文は、現行『蜻蛉日記』の諸伝本には存するるので、『文の栞』の不注意による脱落であろう。たとえば、④の本文脱落箇所の板本本文の前後は、

し空をみれば月はいとほそくてかけはうみ  
のおもてにうつりてある風うちふきてうみのお  
もていとさはかしうきらくときはきたりわ（網掛は私  
に付した）

となつてゐる。おそらく、「……かけはうみのおもて」まで版下を書いたとき、同行の終わりから次行にかけての「うみのおもて」まで書いたと錯覚をおこし、「いとさはかしう」と書き進めたために、「にうつりてある風うちふきてうみのおもて」の本文が脱落したのである。ほかの本文脱落箇所も、④の例と同じく、不用意な目移りなどの原因が考えられる。

『文の栞』の『蜻蛉日記』の紀行部分、特に初瀬詣でと石山詣での本文には、このような誤字や脱文が相当あるが、それは『蜻蛉日記』の紀行部分だけに限る問題ではない。『文の栞』の全体に及ぶ問題について、中野三敏「山岡浚明年譜考」<sup>(注)</sup>の、「安永七年 戊戌 五十三歳 ○正月、浚明編著『文のしをり』刊」の項には、

前述せし浜臣書入本へ岩瀬文庫蔵清水浜臣旧蔵二冊合綴本へには、自序にも書入あり、へ世の中に人もよくし

りたる扶桑拾葉集のぬき書なるをその拾葉の事はいはずしてみつから諸書よりひろひ出したるやうにかけるとはらくる也やゝ等と揚足を取れり。(中略)『泊泊筆話』にもへざれど博に失して疎漏なる事も多かり文栞など次第をだがへ作者もあやまりし事すくなくならずなん有ける」と言へるは確かに浚明の急所を突きし言なるべし。

という解説がある。思うに、田中大秀は、『蜻蛉日記紀行解』の注釈作業をするに当たって、『文の栞』の内包する問題について、すでに承知していたのではなからうか。『文の栞』の初瀬詣でと石山詣での本文には誤字や脱文などの問題があったのに対し、唯一唐崎祓えには本文脱落箇所もなく、また前掲の「関」「帆」のような優れた本文改訂案も見られる。このような『文の栞』の抱える問題点ゆえに、『蜻蛉日記紀行解』では唐崎祓えにのみ限定的に引用される結果となったと思われるが、あくまでそれは推定の域を出ない。

#### 四 おわりに

古写の善本に恵まれない『蜻蛉日記』の本文は、契沖をはじめ、多くの研究者の手によって本文改訂の試みがなされて

きた。田中大秀も『蜻蛉日記紀行解』において、いくつか独自の本文改訂案を提示し、近時の諸注釈書もそれに倣っている。その一例を挙げよう。

安和元年九月、初瀬詣での門出を法正寺の付近で過ごした道綱母は、次の日は橋寺というところに泊まる。『蜻蛉日記紀行解』には、「その泉川も渡わたで橋寺と云所にとまりぬ。」という本文とともに、「泉川もわたらて、元本わたりてとあれと、翌日の条に、明れは川渡りて行にとあるによりて、今改つ。」(『紀行解』十三丁裏)という注がある。現行の諸伝本でも「わたりて」となっている箇所であるが、指摘のとおり、翌朝の「明くれば、川渡りて行に」という記事と矛盾するので、「渡らで」とする『蜻蛉日記紀行解』の本文改訂案が妥当であろう。

『蜻蛉日記紀行解』にはすぐれた独自の本文改訂案もあるが、いかがと思われる箇所も見られる。初度の初瀬詣での場で「見るほどに、車かきすゑて、のゝしりて差渡る。甚やんことなきにはあらねと、賤しからぬ家の子とも、何のそこの君など云者とも」という本文の「何のそこの」に対し、

○何のぞうの君ハ、水母云何の承なるへし。某人ハ誰と不可考と云り。按にそうは族の字音をなたらめて云也。

何の族にて、夫々の家族の人人と云意ならんか。(二  
十四丁表)

という注をつけている。現行の諸注釈書では「なにがしのぞう、すなわち「かみ(督)」「すけ(佐)」「ぞう(尉)」の官位の意として解釈している本文箇所であるが、「家族の人々」の「族」の意であろうという『蜻蛉日記紀行解』の注は、いささか奇異なものに映る。

このような本文改訂を行うときに、それが坂徴著『かげろふの日記解環』の説であるか、あるいは田中大秀の独自の改訂案であるかを区別するため、凡例に次のように示している。

元本に无き字、今補つる多し。右に・点を加つるに、水母子か補つるは左傍水甫と書。大秀か補つるには甫字のみを付へし。(見返し)

元本の誤字脱字と見ゆる処今改つるを、本文として改つるは右傍に・点、甫へるは▲点をしるす。年ころの<sup>▲</sup>諸共に<sup>・</sup>網代<sup>・</sup>しもさし渡したり<sup>・</sup>鳥とも居たち如此右に<sup>・</sup>点を印、其左に改つるは、片仮名もて元本の儘を記し<sup>テ</sup>補たるには甫字をしるす。(中略)善本によりて補改たるは右に○点を印す。かゝる内にも後に又改補たるは他

の例のこし。(見返しの付紙)

見返しに記されているのは、水母子へ<sup>||</sup>坂徴<sup>〵</sup>が補つた本文の左傍には水甫と、また田中大秀が補つた本文には甫字のみを書くという凡例である。しかし、これらの基準によつての表記は、本文改訂の際に必ずしも厳密に守られていたわけではない。次の『蜻蛉日記紀行解』の本文は、初瀬詣での最初の場面である。

暁より出立て、午の時<sup>■</sup>はかりに、うぢのぬんにいたりつく。  
(『蜻蛉日記紀行解』十丁表)

「午の時」の「の」の左傍には「甫」と書いてあるので、これは田中大秀の補つた本文であると思われるが、当該の『かげろふの日記解環』には

暁より出たちて、午の時はかりに、うぢのぬんにいたりつく。  
(『かげろふの日記解環』第六冊十六丁表)

とあるので、坂徴の補つた本文である。この用例は、すでに『かげろふの日記解環』に補われている本文であるにも関わ

らず、田中大秀が補ったという表記になっている箇所である。また、『かげろふの日記解環』には補われていない本文に対し、坂徴が補っていたという記述も『蜻蛉日記紀行解』には見られる。初瀬詣での場面であるが、「薄色なるうす物の裳を引かくれば、腰などに散て（十八丁表）」という本文とともに、

裳の腰などにちりて、に字水母補へり。此あたり猶説有と見へて、熱く解えず。契本にちかひてと改たり。ちりの方よろし。（『蜻蛉日記紀行解』十九丁表）

という注がある。「腰などに」の「に」字は、水母へ＝坂徴が補った本文であるという注であるが、当該の『かげろふの日記解環』には

うす色なるうすものゝ裳をひきかくれば、こしなど、ちりて（『かげろふの日記解環』第六册二十一丁表）

とあるのみで、「に」の字は見られない。『蜻蛉日記紀行解』の傍記が正確ではない例と言えよう。

また、見返しの付紙には「善本によりて補改たるは右に○

点を印す」という凡例があるが、善本による本文校訂および本文改訂案に従っている例は、前掲の『文の葉』の二例（三十四丁表・三十八丁裏）とともに、

此二句伴本に以師本補之とあり。甚宜し。旧本に有しなるへし。（四十五丁表）

伴本に異本とて此十七字を補たり。但、そをしもをゆをしきとあり。今改て補つ。（五十二丁表）

頭さへ以下七十余字、元本に脱せるを契本にて得たり。

定て水府の御本より出たるならんとて、坂本に補り。伴本にも補たり。（五十八丁裏）

の三例が確認できた。「伴本」すなわち伴蒿蹊書入板本の師本というのは、契沖書入れ系統を受け継ぐ、国会図書館蔵小野田重好書入板本のことであり、『蜻蛉日記紀行解』の参考できた善本の類といっても、伴蒿蹊書入板本、『かげろふの日記解環』、『文の葉』程度のものであった。

以上、『蜻蛉日記紀行解』の日記本文および注釈部分を調べた結果、その依拠している本文は、岡田稔氏が「田中大秀と蜻蛉日記」で述べられた「元禄版の刊本」ではなく、宝暦六年版（B）か文政元年版『蜻蛉日記』の板本であることが

明らかになった。また、注釈作業の資料となった『文の栞（和文粹）』の引用が、唐崎祓えにのみ限定されている最大の原因は、『文の栞』そのものが内包している誤字や脱文などの問題にあったと思われる。さらに、田中大秀の参考できた資料は、伴蒿蹊書入れ宝暦六年『蜻蛉日記』板本、長瀬俊香蔵書入板本、坂微著『かげろふの日記解環』、山岡俊明編著『文の栞（和文粹）』程度であったことも判明した。そして、これらの資料を引用するとき、凡例に記されている規準が正しく守られていなかったことも、今回の調査で確認できた。

前述したように、『文の栞』の編著者であると言われている山岡俊明は、静嘉堂文庫蔵宝暦六年『蜻蛉日記』板本にも詳細な本文整理・注釈を残している。その下巻の識語には「かげろふ日記八巻、年ころ考え、こと物にくらへ、たかへるをたゝしたるを、ちかころ百花庵ぬしのおなし心にちからを合せて見出るふしを、しるしつけ侍りぬ 水くきのあはれはかなきあとゝめてきえなんのちのかたみとを見よ 新発意明阿弥陀佛」と記されているように、「百花庵ぬし」へ「萩原宗固」の説を参酌しての成立ではあるが、用いられている宗固の注は少ない。

静嘉堂文庫蔵山岡俊明書入本について、柿本奨氏の『蜻蛉日記全注釈』<sup>注14</sup>では、「内容は契沖の説から完全脱却はできな

かったが、契沖に対し批判的な姿勢を、時にはかたくなと見えるまで、強く持し、そしてそのような態度を示したものは、ほかになかったため、契沖説を受けつく態度の若冲重好系統と共に、江戸時代における本日記研究史上の二大系統の根源となった。」と評しているように、契沖書入本系統の若冲重好系統とは異なる注釈態度を示している。

『蜻蛉日記紀行解』の日記本文は、板本と『かげろふの日記解環』に拠っているが、他にも、「伴蒿蹊翁の考て筆加わられたる本」という書入れ板本と、『文の栞』とを本文校訂の資料として参照している。『かげろふの日記解環』の著者である坂微は、「余力所見ノ契沖本三本ノ内、尾州ヨリ求メシ本ハ谷川淡斎ノ本ヲウツセシナリ」と凡例に書いているように、谷川淡斎へ「谷川士清」の本を参考にしてしている。『蜻蛉日記全注釈』によれば、谷川士清は契沖若冲重好の説を朱書し、自説を墨書しているので、『かげろふの日記解環』も若冲・重好本を受けていることになる。

また、契沖系統書入本の若冲・重好本を受けている伴蒿蹊書入板本と、それとは注釈態度を異にする静嘉堂文庫蔵山岡俊明書入板本をもとにして成立した『文の栞』とを『蜻蛉日記紀行解』は参照しているので、研究史上の二大系統の注釈を受け入れる結果となり、そこに本書の最大の意義があると

言えよう。

注

注1 岡田稔「蜻蛉日記紀行解について」、『国漢研究』（第七十一号）、名古屋大学国文学会、昭和十年二月

名古屋大学国文学会、昭和十年二月

注2 柿本奨「蜻蛉日記全注釈」角川書店、昭和四十一年十一月

「ともに」〈蜻蛉日記解環補遺〉と「蜻蛉日記紀行解」〈解環〉に対する異見の形で多数の新見が提唱されており、宣長門下らしい読みの確かさが示されていて、非常に有益である。後者は本日記の紀行の部分抽出しての注釈であり、その緻密さは当時としては空前のものであり、現代でも光彩を失っていない。

注3 木村正中『日本古典文学大辞典』岩波書店、昭和五十八年十月

「伴蒿蹊加筆および別に一本の書入本、山岡浚明編『文の栞（和文粹）』の本文を参照している。一旦書いた草案を抹消したり、傍記、余白への追記、付箋もきわめて多く、改案や補説による苦心の跡がまざまざと示され、原型本文の推定・語義・語法・考証など、『解環』とくらべてもはるかに厳密かつ詳細になり、今日の通説のもとをなす卓見も数々ある。」

注4 森田兼吉『日本古典文学大事典』明治書院、平成十年六月

「大秀はかねて『かげろふの日記解環』に補足訂正等を書き入れていた（『蜻蛉日記解環補遺』）。その紀行部分の注釈を詳細にして刊行しようとしたものだが、草稿のまま『解環』書き入れと共に高山郷土館に残る。『土佐日記解』に続く注釈で、紀行に限定したのはこの時代の紀行の隆盛と関わる。」

注5 岡田博子『日記文学事典』勉誠出版、平成十二年二月

「地名、自然、人名、儀式（大嘗会）などについて『古事記』『枕草子』『更級日記』『源氏物語』『今昔物語』などの記事との照合をはかることにより、詳細かつ綿密な注釈と語釈、考証を施している。」

注6 岡田稔「田中大秀と蜻蛉日記」『国漢研究』（第七十一号）、名古屋大学国文学会、昭和十年二月

注7 上村悦子「蜻蛉日記版本の研究」『蜻蛉日記の研究』、明治書院、昭和四十七年三月

「宝暦版にはA（元禄版と一致）とB（文政版と一致）と二種がある。ただし、A・Bの相違は版本十七丁より二十丁の四丁間のみに限られていて、他の部分では宝暦版はすべて一本である。（中略）元禄版と宝暦版の相違は後掲のように上巻や下巻にもわずかであるが見られる。しかし相当な数がこの上巻長歌のあたりすなわち版本十七丁より二十丁の四丁にあることは問題である。」

注8 四丁の他にもわずかではあるが、上・中・下巻に異なる語句があることを上村悦子氏は指摘している。しかし、これらは

版本の摩滅による異同であって、厳密な意味での異同とは言えないのであろう。また、象徴による異同もあるが、すべて『蜻蛉日記紀行解』の対象となる日記本文には該当しない箇所である。

注9 以下、本文の引用は今西祐一郎校注『蜻蛉日記』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九八九年十一月）による。

注10 元禄十年版『蜻蛉日記』は国会図書館蔵小野田重好手校本、宝暦六年版『蜻蛉日記』は静嘉堂文库蔵山岡浚明書入本、文政元年版『蜻蛉日記』は九州大学文学部蔵松濤文库本にそれ



ぞれよる。

注 11 岡田稔「蜻蛉日記に関する新発見二」『国語と国文学』、至文堂、昭和七年五月

注 12 『かげろふの日記解環補遺』では、『蜻蛉日記紀行解』で引用している六箇所以外にも、「唐崎祓え」直後の本文で二例、「唐崎祓え」の一ヶ月後である「盆の事」の本文で二例、計四例の『文の栞』を引用しているが、いずれも『蜻蛉日記紀行解』の範囲ではない。

注 13 中野三敏「山岡凌明年譜考」『近世中期文学の諸問題二』近世文学史研究会の会、昭和四十四年一月

注 14 注 2 に同じ。

【付記】 本稿は、二〇〇九年度西日本国語国文学会（於、別府大学）における口頭発表をもとにまとめたものである。発表に際してご教示を賜りました先生方に御礼申し上げます。なお、本研究における資料を提供して下さい下さった今西祐一郎先生にも御礼申し上げます。

（きむ よんちゃん・韓国啓明大学校非常勤講師）